
毒舌くのいち

神童サーガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毒舌くのいち

【Nコード】

N4285F

【作者名】

神童サーガ

【あらすじ】

毒舌くのいちと天然少年の話。少しシンデレくのいちです。

「カスガよ・・・」

「はい・・・」

場所は、木に覆われた山奥。

片膝立ちをしてる少女。高い位置からポニーテールをしてるのに、腰まで伸びてる漆黒の髪。忍服を着ている少女カスガ。目の前には、白い髭を生やしている見るからに仙人な老人がいる。

「さっさと言えよです。ジジイ」

「敬語が違うのか分らねーよ」

「ジジイも若者言葉使っんじゃねーよ」

さっきまでと言葉遣いが違うのは驚くが、この際気にしないでいようか。

問題は、ジジイの方だ。何なのか分らない。

「で、何なんだよです」

「もう普通に喋ろ」

呆れたジジイ。話を続けたジジイ。

「天塚家の息子の護衛を任務とす」

「天塚家って・・・昔からの殿様家庭だよね」

意味が分りません。ジジイは説明をしなかった。理由は面倒だから。

「私達忍が代々仕えてる偉いところでしょ？」

「簡単に言えばな・・・」

ポンと手を叩いた。分ったようで安心したジジイでした。

「その息子って、どんな奴なの？」

「一応偉いから言葉遣いには気をつけろ」

いや、ジジイもだよ。“一応”って・・・。

「とりあえず行つて来い」

詳しい内容を言わずに無理矢理追い出されたカスガ。

「ここが天塚家？」

旧家が聳え立ってる。日本庭園が見える。本当に今って21世紀
って思わせる。まあ、忍もだけど。

「うわぁ・・・女の子？」

「あの・・・男です」

見下ろすと制服を着てる少年かどうか分らない子がいた。
ワイシャツの首元を開けて、ネクタイも緩めてる。今時の若者っ
て風に制服を着込んでる。

男子制服なのに女顔だから、男装した女の子って感じ。

「キミは天塚家の者？」

「そうですが、貴女は？」

急に自分の家に、忍者のコスプレをした奴が現れれば動揺もする。
オドオドした様子でカスガに話し掛ける。

「・・・守りたくなるか？」

失礼な発言だった。可愛いから守りたく無いのですか？カスガ。

「あの・・・」

「私はカスガ。貴方を守るために参上しました」

礼儀正しく、地面に手を付いて片膝を立ててる。
少年は、オロオロしだした。

「あ、えっと・・・あの・・・」

「お主が、くのいちか？」

聞き覚えの無い声がした。そちらの方を見ると、杖を付いた老人がいた。

「お祖父さま・・・」

「サヤ・・・この娘は、ワシら一族を影から支えた者達の娘だ」

少年の名前はサヤらしい。やっぱり女の子っぽい名前だ。

「この娘は、この家に住まわせて、随時サヤを守るのだ」

「随時!？」

「住む!？」

老人の話にサヤとカスガは驚いた。

「もちろん寝る時もだ」

お祖父さまの発言に真っ赤になる二人。
カスガも、毒舌ながらも女の子なのです。

「寝る時も・・・」

「お祖父さま、学校は？」

「もちろん行かせる」

ボソツと言ったカスガの声は聞こえて無い。
カスガ達は、家に入った。

あつという間に就寝時。サヤの部屋は和室なので、布団を並べる。

「・・・えつとカスガ。明日からよろしくね」

「嫌だけど仕方無いし」

カスガの言葉に苦笑いを浮かべたサヤ。
その笑みに顔が赤くなり布団に潜り込んだ。
その様子に笑いを堪えながら布団に入った。

「・・・よろしく」

ボソツと聞こえたカスガの声に嬉しそうにするサヤ。無理をしな
いで、とサヤが言ったの、カスガに伝わっていただろうか。

「んっ・・・おはよカスガ・・・ってアレ？」

サヤが起きるとカスガはいなかった。布団が綺麗に整頓されてた
の見て、夢じゃなかったんだと安心したサヤ。

「おはようございますサヤ様」

「ん。敬語じゃなくて良いよ？」

寝ぼけ眼で、フニヤと笑ったのを見たカスガは赤くなって、フィ
と横を向いた。

「朝ご飯だね」

居間に行くと、卓袱台の上に日本だ、という風な食事があった。
お魚から、卵焼きや、味噌汁があった。

サヤは、ゆっくりと食べてる。カスガは、早目に食べてたので、
見守っている。

「ごちそうさま・・・」

三十分掛けて食べ終わった。

サヤは、ノロノロと着替えに行く。カスガは、庭を眺めてる。

「終わったよ」

「じゃあ行こうか」

着替え終わった様子で、カスガと一緒に家を出た。
余談だが、カスガの格好は忍服。

「眠い」

「危ない!!」

寝ぼけて周りを見ずに歩いてたせいで、車が飛び出したのが気付

かなかったサヤ。

サヤの首に腕を回して止めたカスガ。
傍からみればカスガが後ろから、サヤを抱き締めてるように見える。

「っ……ありがとう」

「マイペースなのは良いけど気をつけてよ」

後ろに感じる体温に身体が熱くなるサヤ。
なんとか冷静に堪えて答えた。

「おはよ……ってソイツは？」

学校に着いたら、すぐに友人が話し掛けてきた。

「あ、僕の護衛だって」

「はあ？」

友人は、わけが分らないように言ったが、サヤの方が分らないだろう。だって、説明出来ないから。

「サヤくん」

クラスの子が現れた。

見た目は、ギャルの女の子だけど性格は真面目な子。
そして、サヤを好きなのだ。

「なに？レイさん」

「付き合って無い・・・ですね？」

レイと呼ばれた女の子の言葉に、微かに頬を染めたサヤ。
カスガは、窓の外をボーッと見てるから気付いて無い。

「・・・サヤくん・・・私・・・好きです」

「なにが？」

マイペース故に鈍感なサヤだ。覚悟を決めたのに肩透かしなレイだった。

「・・・サヤくんが」

「・・・え」

突然の告白に動揺するサヤ。その告白を聞いたカスガは、クナイをレイに投げた。

クナイは、レイの足元に刺さり怪我は無い。

「カスガ！危ないだろ！！」

「っ・・・」

下唇を噛み締め逃げ出したカスガ。
微かに涙目になっていたカスガに、驚きを隠せないサヤ。

「カスガ・・・」

「あ、サヤくん」

「・・・ごめん。その告白は受けれない。今の僕には恋愛なんて分らないから」

サヤはカスガを追いかけるために教室を出た。

「なんで・・・イライラしたのさ・・・ムカつく」

自分の感情が分らないようだ。
ちなみに、今は屋上にいます。

「空は自由でいいな・・・」

雲一つ無い快晴に想いを馳せるカスガ。

「鷹？」

自分の飼っている動物が、自分の上空で旋回してる。

「なに・・・え・・・サヤが!？」

どうやらサヤが、カスガを追うために学校を飛び出したようで、

その時にどっかの悪い奴等にさらわれたようだ。

「私のせいだ・・・あんなブスに戸惑ったから」

相変わらず毒舌が激しいカスガ。

「もしサヤに何かあったら・・・覚えてろ・・・あのブスも含めて」

怒りに沸騰しているカスガ。ボソツと呟いた途端に消えたカスガ。

「・・・テメーらか？」

「んだと？」

どっかの廃墟に着いた。カスガの目の前には、縄で繋がれたサヤとヤクザっぽい人がいた。

「産業廃棄物のくせに・・・サヤに触れるなんて・・・消えてしまえ・・・燃えてカスになっちまえ」

レイのこともあったせいか、イライラの頂点・・・沸点を越してたようだ。

「明日・・・新聞に載るね・・・ボロボロになった二人のポケ茄子が街中に放置ってね」

「!!」

カスガに殴り掛かったヤクザAをかわして、ボソツと何かを言った。

「なに？命乞いか？」

「さあ・・・パーティーの始まりだよ」

歪んだ笑顔で笑って言った途端に現れたのは、ネズミだった。しかも、数万匹という大量。

ネズミは、ヤクザの二人にくつつき、二人の服を食い破る。払ってるが何万匹もいるので消えない。

カスガは、その間にサヤに近付きクナイで縄を切った。

「大丈夫ですか？」

「ありがとう・・・カスガ」

「・・・なんでしょう」

仕事口調で話してるが、サヤに会い辛いため口ごもるカスガ。

「・・・聞いて？」

真面目な顔で言ってるサヤに戸惑いを隠せないカスガ。
仕方なく頷いた。

「まだ・・・僕には好きって分らないから・・・分るまで待つてくれる？」

「私は・・・ただ、貴方を守ることだけが仕事なんです」

「うん・・・これからよろしくね」

カスガに抱き付いたサヤ。カスガは真っ赤になってる。
そして、カスガはキリツと顔を変えて、サヤに聞こえないように言った。

「燃えるゴミでも良いけど・・・なるべく人の目に付く所に放置して・・・あと、人さらいをしたって紙を着けて」

近くにいた味方の忍者に言った言葉だった。

サヤを支えながら歩いて家に帰った。

二人の表情は、晴れやかだった。

どこの人よりも、主従関係が強くなりそうな二人だった。

だけど、いつかはこの気持ちに変化がついて、二人の関係が変わる日が来るのだろうか。

ついでに、次の日の新聞には・・・。

『交差点に変態出現。』

彼らの格好はボロボロで、ほぼ裸だった。

警察は、彼らに着いてた紙を見て逮捕に踏み切ったようだ。』

「私の主に手を出す奴は・・・容赦しないよ」

(後書き)

。 不完全燃焼でした。 続きとか書きたいけどネタが浮かばないし・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4285f/>

毒舌くのいち

2010年10月28日08時24分発行